慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	セイの消費論
Sub Title	
Author	増井, 幸雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1931
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.25, No.6 (1931. 6) ,p.737(1)- 791(23)
JaLC DOI	10.14991/001.19310601-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19310601-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

時代は眞の
合理化を要望する
三田洋服聯盟の誕生により
不正競爭絶對に排除
原價切下げ斷行さる
夏服の御用命は
是非!!
三田の聯盟洋服店
井澤洋服店 電話三田(45)三五三二番
井筒屋洋服店 電話三田(45)三五九七番
原洋服店 電話三田(45)三四三四番
高島屋洋服店 電話三田(45)三四六二番
中島洋服店 電話三田(45)三四八九番
テーエム洋服店 電話三田(45)三八四六番
佐藤洋服店 電話三田(45)三五四三番

三田學會雜誌　第二十五卷　第六號

セイの消費論

增井幸雄

一

ジャン・バティスト・セイは消費を論じたる最初の人でないことは云ふ迄もない。アダム・スミスが既に消費こそ生産の唯一の目的たることを述べて居る(1)。又スミスの國富論と同年に公にせられたる著書中に於て、コンディャックは一章を設けて、生産が如何に消費に從つて調整せらるるかを論じて居る(2)。否、更に是等兩者に先つて、千七百七十年にテュルゴー(3)が、又千七百六十七年にはボードーが(4)、

それ〴〵簡單ながら消費の性質を論じて居る。併しながら、消費の爲めに一個の篇を設け十數章乃至數十章を設けて之を詳說することはセイを以て嚆矢とすると云ふことが出來よう。洵に、消費論の爲めには、其の主著『經濟學』(5)に於ては十一個の章より成る其の第三篇が充てられ、今一つの主著『實際經濟學講義全』(6)に於ては三十二章より成る第七篇が之に充てられて居り、何等篇別を行はざる『經濟學問答』(7)に於ては全部で三十章の中、最後の七章が之に充てられて居るのである。

(1) Adam Smith, Wealth of Nations. Cannan's edition, vol. II. p. 159.
(2) Condillac, Le Commerce et le Gouvernement considérés relativement l'un à l'autre. Première Partie, ch. XXIV.
(3) Turgot, Septième lettre au Controleur Général, 2 décembre, 1770. (Œuvres de Turgot et documents le concernant, par Gustave Schelle, Tome III, p. 313 et suiv.)
(4) Nicolas Baudeau, Première Introduction à la Philosophie Economique, 1767, publié par A. Dubois, 1910, p. 5, 7, 13-15, 114; do, Principes de la Science morale et politique sur le Luxe et les lois somptuaires, 1767, publié par A. Dubois, 1912, p. 6 10, 10 14.
(5) J.-B. Say, Traité d'Économie Politique. 千九百三年出版の初版に於ては第五篇となつて居る。

(6) do., Cours Complet d'Economie Politique Pratique, 1828-29.
(7) do., Catéchisme d'Economie Politique, 1817.

消費論に充てられたるセイの多數の章節は自ら三個の部分に大別せられる。第一は消費の性質と其の結果とを一般的に論ずる部分である。『經濟學』にあつては第一章から第四章に至る四章、『經濟學講義』にあつては七個の章から成る第一部、『問答』にあつては第二十四章及び第二十五章が之である。第二は私的消費を論ずる部分である。『經濟學』にあつては第五章、『講義』にあつては第八章乃至第十二章より成る第二部、『問答』にあつては第二十六章が之である。而して第三は公的消費を論ずる部分である。『經濟學』にあつては第六章乃至第十一章、『講義』にあつては第十二章乃至第三十二章より成る第三部、『問答』にあつては第二十七章乃至第三十章が之である。

此の小篇に於ては、以上三部分中の第一の部分に展開せられたる思想の梗概を窺ふことにする。

二

セイは先づ第一に消費の性質を取扱ふ。

消費なる語は、セイ以前に於ては物質の消費、物質の滅失破壞と云ふ意味で使用せられたことが少くない。例へばボードーの如きは其の一例であつて、「吾人の享樂に適する物件が吾人の行ふ之が使用そのものによつて早晩滅失することは自然の法則なり。消費と呼ばるゝ所のもの即ち是れなり」(1)と云つて居る。然るにセイは、消費と云ふ場合には物質の消費と云ふ意味に於てせずして、價値の消費と云ふ意味に使用して居る。曰く、「社會的の富の中に宿れる效用は、全部又は一部分之を傷くることなく破壞することなくしては、從つて又その價値を傷け又は破壞することなくしては、吾人之を使用に供すること能はず、吾人は吾人に營養として役立つ食物の價値を完全に破壞す、而して毎日吾人は吾人を蓋ふ衣服の價値を部分的に破壞しつゝあり。消費と呼ばるゝは此の價値の破壞なり」(2)と。セイが消費と云ふ語を使用するに當つては、彼れが生產と云ふ語を物質の創造と解せずして效用の創造、價値の創造と解するのと全く相對應して之を使用して居るのである。

(1) Baudeau, Première Introduction à la Philosophie économique, ch. I. No. IV. (éd. Dubois, p. 5.)

(2) Say, Cours Complet etc., VIIe Partie, Première Division, ch. I.

既に消費は效用の破壞であり價値の破壞であるとせられる以上は、消費が效用を有し價値を有する生產物に就いて、即ちセイの所謂社會的の富に就いて行はれ得るものなることは明白である。セイは、「總べての生產物は消費せられ得。蓋し、若し價値にして物に附加せられ得たるものなりとせば、價値は又物より取り去られ得るを以てなり」(3)と云ふ。併し、效用なきもの、特に價値なきものは消費の目的物とはなり得ない。「吾人は自然的の富を消費すること能はず。吾人は、空氣を呼吸することによりて空氣を傷け、空氣が吾人の生命を維持するの性質を破壞することと眞實なるも、而も吾人は毫も富を消費することなし。蓋し、空氣は毫も價値を有せざるを以てなり。吾人は一の犧牲を拂つて之を獲得することなく、之に支拂をなすことなくして、之を享受し得るを以てなり」(4)。

(3) Say, Traité, VI. éd., p. 435.

(4) Say, Cours Complet, VIIe Partie, ch. I. (Ed. Bruxelles, p. 403.)

セイに據れば、價値を生產することは富を生產することである。價値を消費す

ることは富を破壞することである。生産は利得である。消費は喪失である(5)。然るに、富の喪失には二つあり得る。人間社會から富が喪失することは其の一であり、一國から喪失することは其の二である。今、富を外國に輸出することは、第一の意味に於ては喪失ではないが、第二の意味に於ては喪失である。從つてセイは、輸出は消費の中に包含せしめらるべきものであるとする。曰く「一人の消費、數人の團體の消費、一國の消費を評價する場合には、輸出は之を消費中に包含せしむるを適當とす。輸出せられたる價値は、之を輸出する人々にとり一國全體にとりては、爾後一切の消費より剝奪せられたる價値なり」(6)と。此の事、猶ほ、彼が輸入を以て生産と見、商的生産と見るのと同樣である(7)。

(5) Say, Cours, p. 403.
(6) Say, Cours, p. 404; Traité, p. 438.
(7) Say, Traité, p. 438.

消費の行はれる態樣には種々ある。即ち、セイは之を説明して、第一に、迅速なものと遲緩なものとがあると云ふ。無形生産物の消費は其の生産の瞬間に於て行はれるのであつて最も迅速である。有形生産物の消費は之よりも遲緩であるが、而も熟したる果物や調理濟の食物の如きは比較的迅速に消費が行はれ、家屋衣服等の消費は比較的遲緩である。又、消費が全部的に行はれる場合と部分的に行はれる場合とがあると云ふ。食物の如きは前者の例であり、家屋家具等の如きは後者の例である。又、富の創造せられたる目的に合するが如き消費と然らざる消費とがあると云ふ。食料品を食用に供する場合と之を投棄する場合とは各々その例である(8)。以上の説明は無難である。唯、今一つ、消費が自意的に行はれる場合と然らざる場合とがあると云ふ説明だけは承認せられ難い(9)。蓋し、セイは自己の意思に基かざる消費の例として家屋の燒失や船舶の遭難を擧げて居るが、消費は價値破壞といふ單なる客觀的事實と見るよりも、寧ろ價値破壞の行爲と見るが適當であり、從つて人間の意識的、自意的行爲と見るが適當であるからである。更にセイ自身は、後にも述べるが如くに消費を以て一個の交換と見て居るが、自己の意見に基かざる價値破壞の事實は、與へる所のものの代りに受取る所のものが何物もないのが通例であるからである。

(8) Say, Traité, p. 436; Cours Complet, p. 404.

(9) Maurice Block, Les Progrès de la Science Economique depuis Adam Smith, Tome II, p. 523.

猶ほ、セイは消費なる語と支出（dépense）なる語との異同を說く。普通の用法に於ては支出なる語は消費なる語と同義語として使用されて居るが、兩者の間には相違があるとする。支出とは貨幣の支出であり、購入である。吾人の消費せむと欲する所のものを獲得することに過ぎない。購入しても未だ之を消費せざる間は其の物の效用も價値も何等傷けられることはない。それは單に、吾人の消費せむと欲する價値を吾人の欲望に適合する形態の下に齎らす所の交換に過ぎない(10)。吾人は自ら生產したる生產物を消費することもあるが、消費の最大部分は購買の結果として即ち支出によりてのみ行はれる。是れ消費と支出とが同義語として使用されるに至つた理由であるが、嚴密に云へば兩者は素より同一事ではない、と云ふのである(11)。

(10) Say, Cours, VIIe Partie, ch. III.

(11) Say, Traité, p. 442.

III

第二にセイは、國民經濟上に於ける消費の地位を論ずる。

消費が有らゆる生產の唯一の目的なることは既にアダム・スミスによつて道破せられ(1)た所であるが、セイも亦此の事を指摘して居る。曰く、「凡そ生產せられたるものは早晩消費せらる。更に進んで云へば、生產物は消費せられむが爲めにのみ生產せられたるものなり」(2)と。又セイは、消費者の欲望こそ生產を喚起するものであるとする。曰く「何れの國に於ても、消費者の欲望が生產者の創造を來さしむるものなり。欲望の最も多く感知せらるゝ生產物は最も多く需要せらる。最も多く需要せらるゝものは、產業に對し、資本に對し、土地に對して、最も大なる利潤を與ふ。而して此の最大の利潤は、是等の生產手段を此の生產物の創造に向つて使用するに至らしむ。同樣に、一生產物の需要せらるゝこと少きときは、之を作るも利益少く、斯かる生產物は製作せらるゝことなかるべし」(3)と。セイは欲望の擴大發展を謳歌するものである。欲望大なれば生產が擴張される。「製作せられたるものは價値低落す。生產物の價値低落せば之が使用を助長す、斯くして全部消費し盡さる(4)。其の結果は國民の生活程度の向上となつて表はれる。彼は此の

意を次の如き言葉を以て表はして居る。曰く「或る著書中に於て、欲望を有すること極めて少き國民を模範として提唱し居れる者あるも、寧ろ欲望を有すること多くして而も之を滿足せしむるの途を知るを以て一層優れりとす。斯くして始めて、啻に人口の増加を來すのみならず、更に進んで各個人の生存が益々完全となるに至るなり」(5)と。而してステューアートが、ラセデモーン人が何物をも生産することを能はざりしが爲めに何物も無くして濟まし得たるの故を以て彼等を賞讃して居るのを見て「斯くの如きは未開野蠻の民族の間に於てこそ共通的に完全無缺とせられたる所なり。斯かる意見を共の最後の推論にまで推し進めむか、完成の極致は何物をも生産せず又何等の欲望をも有せざるに在ること、即ち全く生存せざるに在ることを發見するに至らむ」(6)と云つて、之を嗤つて居るのである。

(1) Smith, Wealth of Nations, Cannan's ed., Vol. II., p. 159.
(2) Say, Traité, p. 437.
(3) (4) do., p. 439.
(5) (6) do., p. 440.

四

第三に、セイは消費の一般的結果を論ずる。

有らゆる消費から生ずる最も直接なる結果は、消費せられたる生産物の所有者にとつて生ずる價値の喪失といふことであり、從つて又富の喪失といふことである。此の價値の喪失は恆常・不可避的のものである(1)。併しセイは、此の價値喪失は何物によつても償はれないものではないと考へて居るのであつて、「此の價値喪失は、或は人の之より取得する滿足により、或は屢〻之より結果する利潤により償はる」(2)と云つて居り、又「總べての消費は消費せられたる價値と等しき損失たり犧牲たるも、此の犧牲の賠償と考へられ得る利益を之より取得することなくして消費するは愚なり。……吾人は、二つの方法によりて、即ち滿足せしめられたる欲望より生ずる福祉によりて、或は消費せられたる價値と同額又は之よりも多額の富の生産によりて償はる」(3)とも云つて居る。而して、生産論に於て生産をば、生産的勤勞又は費用を與へて生産物又は價値を受取る交換と見做したると同樣に、消費をも一個の交換と見做し、それは獲得せられたる富を與へ又は勤勞を與へて滿足を受取り或は新なる富を受取る交換であると述べて居るのであつて、代りに滿

足を受取る所の消費は之を不生産的消費と呼び、新なる富を受取る消費は之を再生産的消費と呼んで居る(4)。

尤も彼は、事物を根本的に考へると此の命名は當を得て居ないことを認めて居る。吾人の欲望を滿足せしむる消費は一個の眞實の財たる滿足を生ぜしめるのであるから不生産的たるのではない。さればとてそれは生産的消費でもない。何となれば、生産の手段たるものは獨り生産的勤勞、即ち産業、土地及び資本の作用のみに外ならないからである。……併し人に了解して貰ふ爲めには世間通用の語を使用せざるを得ない。讀者は現象の起り方を洞察して用語の末に捉はれざることを努めなければならぬ(5)と云つて居るのである。

(1) Say, Traité, p. 440.
(2) Say, Cours, p. 403.
(3) (4) Say, Cours, p. 405.
(5) Say, Cours, p. 405 en note; Traité, Épitome, art. Consommation, Consommer.

五

消費全般の結果を論じたるセイは、更に進んで再生産的消費と不生産的消費との結果を分説する。

先づ再生産的消費の結果に就いて說く所を見るに、再生産的に消費せらるゝものは資本價値であるが、其の消費の直接の結果は、それが需要を生ぜしめ、此の需要が需要せらるゝ物件の價格に對し並に生産に對して影響を與へる點と、是等の物件の價値を破壞する點とに於ては、不生産的消費の場合と同一であつて、唯それが何等の欲望をも滿足せしめないと云ふ點に於て之と相違するのみであると云ふ(1)。勿論、「生産的消費は、之を命ずる企業者をして新生産物の所有者たらしめ、而して此の新生産物の價値が彼に對して、消費せられたる價値を償還し且つ利潤を支拂ふを通例とする」のであつて、此の利潤が生産者に享樂を齎らすの役に立ち得ることは疑ないが、併し此の享樂は再生産的消費から直接に生ずるものではなく、右の所得の支出の結果、購買の結果として行はれ得る別個の不生産的消費から生ずるに過ぎないのである(2)。

(1) (2) Say, Traité, p. 443.

セイが消費を價値の喪失と見て居ることは前に述べたが、此の點から云へば、再

生産的消費に就ても消費を節約するときは之によつて利得する所あること、恰かも生産額を増加せしめることによつて利得する所あると同一なること(3)は明白である。唯、それが積極的の利得たる代りに消極的の利得たるの相違あるのみである。而も是等の利得は、單に之を得たる再生産的消費者、即ち生産者の利得たるに止まるにはあらずして、結局は轉じて社會の利益となるを通例とする。蓋し、それは生産費を減ぜしめ、此の節約方法が周知せられ普及するに從つて生産者間の競爭は生産物の價値を其の減少したる生産費の程度まで低落せしめるに至るからである(4)。

(3) (4) Say, Traité, p. 444-5.

再生産的消費に於ては、消費せらるゝ資本價値は再生産によつて回復せられ永續せしめられる(5)。而も此の價値が不斷に利潤を生まむが爲めには、常に又益々大量に生産を反復し得るの可能性あることを必要とする。從つて「生産者の見地からすれば、最も有利なる消費としては再生産的消費が其の第一位に推される」(6)。蓋し、再生産的消費はそれ自身の中に其の再開の萠芽を藏して居るからである。

工場に於て使用されるものの製造は決して休止することはないのである。之に反して、奢侈品の製造は頻繁に再開せられない、少くも同じ形の下では再開が頻繁でない。類似の理由によつて、勞働者階級にとつて常に必要なる物件の生産は最も不斷に仕事のある職業を生ぜしめるのである。一見したる所では、富者に新なる嗜好を喚起することによつてのみ新なる利潤を發見し得るやに考へられ得る。現在購入しつゝある高以上に購入するに充分なる金錢を有するものと想像せられ得るものは富者のみである、而して彼等は既に必要品は之を有して居るのであるから、生産者は、奢侈品を作らむが爲め、享樂によつて鈍つた富者の感覺を刺戟せむが爲めに苦心するのである。併し、貧窮なる階級に新なる嗜好を喚起することは遙に多く重要である。蓋し、彼等貧民は此の新なる嗜好を滿足せしめる爲めに新なる努力を行ふであらう、而して茲にこそ多數の消費者と生産者にとつて盡きることなき資源が發見されるからである。

(5) Say, Traité, p. 437.
(6) (7) Say, Cours, p. 412.

六

次に不生産的消費の結果に就いてセイの說く所を見るに、彼は先づ不生産的消費は人間の存在及び向上の爲めに必要なものであり、人の道德的完成も幸福も共に不生産的消費の如何に繫つて居るものであるが、それは社會の富には何物をも附加する所はないと云ふ(1)。恰も後年バスティアが「破壞せられたる窓硝子」(2)の題下に於て論じたると同一の論法を以て、消費せむが爲めの消費、何等の生産を伴はぬ消費は、一部の生産者を排してのみ他の生産者を助成するに過ぎず、單に代位を來すのみにて生産の增加を來さぬと云ふ(3)。而して不生産的消費を不利なりとする點に於てマルサス及びシスモンディと意見を異にして居るのである。

即ち、彼はマルサスを評して、マルサスは世に無爲の利子衣食者あることを有利なりと見て居り、何等爲す所なくして享樂すると云ふ心地よき職分を引受ける者が或る數だけ社會に存することを是認して居るが、斯くの如き意見は疑もなく著者の意圖に反して有らゆる弊害の辯護に導くものである(4)と云つて居る。又シスモンディが、若し國を擧げて單なる勞働者と同樣に勞働し十倍の貨物を生産するとせんか、各勞働者の地位は從來よりも良好となることなきのみか却て十倍だけ不利に陷らむと述べて居るのを引用して、シスモンディの憂ひとする所は生産物が各人の消費能力以上に達せむことに在るのであるが、各人は生産多きに從つて消費量を增すことになつて過剩の事實は起らぬ、各人ともに一定時に於ける消費能力に限りあることは事實であるが、此の能力は時と共に擴大することは過去の歷史が證明する、此の擴大は無形生産物の場合に於て特に無限大である、と評して居る(5)。要するに、之は生産消費の均衡に關する論爭の延長であり、販路の理論の應用に外ならない。(6)是等の批評に現はれたる原理に對しては、是れ奢侈的支出を禁じて民衆を野蠻の中に追ひやるものなりと評した者がある。サン・シャマン子の如きは是れであるが、セイは之に對して、予は費用に比例する滿足を生ぜざる支出を非難したるのみである、自己の資産の堪ゆる一切の享樂を得ることは頗る結構であるが、同時に是等の享樂は毫も個人の幸福を增さず國の富を增さゞることを承認するを要する旨を答へて居るのである(7)。

(1) Say, Traité, p. 446-7.

(2) Bastiat, Ce qu'on voit et ce qu'on ne voit pas, I, La vitre cassée. (Œuvres Complètes, par Paillottet, Tome V, p. 337.)

(3) Say, Cours, p. 408. セイは、バスティアの窓硝子破壞の例の代りに、食堂に於ける酒瓶の窓外投拋の例を以てして居る。

(4) Say, Cours, p. 408-9.

(5) do., p. 409-411.

(6) セイの販路の理論を中心とする生産消費の均衡に關する論爭に、就いては先年本誌上に可なりの長文を載せたことがある。第十九卷第四號參照。

(7) Cours, p. 411.

不生産的消費は生産を伴はず、間接にすらも生産物の高を增加せしめないものであるが、併しそれは其の創造を喚起する所の生産物の種類には影響を與へる。「古い經濟學者の『此の消費にして此の生産あり』と云ふ格言は眞實なる、而も同時に虛僞なる提言である。生産する物の種類に就て云ふときは眞なるも、生産せらるゝ價値の量に就いて云ふときは虛僞である」(8)とセイは云ふ。然らば其の影響は如何に現はれるか。セイの云ふ所に據れば、消費者が良く作られたる生産物を使用するの習慣は、製作者をして之を良く作るの習慣を作らざるを得ざるに至らしめる。而して此の習慣は生産者にとつても消費者にとつても等しく有利なる結果を齎らすものである。之に反して消費者の無關心は、生産物の粗造を來さしめ、延いて輸出を害するに至る。又消費者の嗜好が舊式である場合には、生産者は消費者の意を迎へざるを得ないから、其の才能の一部を失ふことになる、と云ふに在る(9)。

(8) Say, Cours, p. 411.

(9) do., p. 413.

七

不生産的消費に關してセイの論じて居る事項にして今一つ茲に記すべきものがある。それは、賢明なる消費の準繩如何と云ふことに關するものである。茲に賢明なる消費、不賢明なる消費とは如何なる消費を指すか。セイは、前者によつて富の眞實の生産の後に於て家族及び國民の幸福に對して有力に影響するものを意味し、後者によつて家族及び國民の不幸に對して有力に影響するものを意味して居る(1)。然らば兩者の區別の標準は如何なる點に見出されるか。セイ

は、消費からして消費者に生ずる損失と滿足とを比較することに見出されると云ひ、此の損失を評價し之と滿足とを比較する判斷の正しきや否やによつて賢明なる消費と不賢明なる消費との區別が生ずると云ふ(2)。尤もセイは、此の損失と滿足との二つの分量の比較は之を再生產的消費の場合ほどに正確な基礎の上に立たしめることを能はざるものなることを認めて居る。而して其の理由としては、此の場合、犧牲と滿足とを比較しなければならないのであつて、評價に於て何等か漠然たり臆斷的たるものを感ずるといふ一事を擧げて居るのであるが、而も吾人は、假令此の評價及び比較は困難なりとも、之を無關心で看過することは出來ない(3)、と云つて其の標準を示して居る。

（1）（2）Say, Traité, p. 448.

（3）Say, Cours, p. 416.

セイの示す標準は四つある。其の第一は、眞實の欲望を滿足せしむる消費たることに在る。眞實の欲望とは、吾人の生存、吾人の健康、並びに大部分の人間の滿足が之に基づくが如き欲望を意味するものであつて、氣分や感情や出來心から來る欲望と對立する。人に術はむが爲めの奢侈は、空虛なる滿足を與へるに過ぎない。又それは限度あることを知らない。今、是等二種の欲望と滿足とを比較するとき、全體として考へたる社會は、擬巧的欲望を充たす滿足よりも、眞實の欲望を充たす滿足を以て一層有利とする。富者の香水の消費と貧者の嚴寒に於ける暖き衣服の消費とを比較するに、前者の場合には社會は無益短時間にして僅少の快樂を得るに過ぎざるに反し、後者の場合には堅實永續的にして而も貴重なる幸福を得ることになる(4)。

（4）Say, Traité, p. 448; Cours. p. 417-8.

第二の標準は遲緩なる消費、優良品の消費たることに在る。消耗遲緩にして使用の頻繁なる物の使用は賢明である。流行の變遷の甚しいものは未だ效用ありと新鮮味を失はざる間に既に廢棄せらるるといふ不利がある。又、假令高價なりとも優良品を消費するを賢明なりとする。蓋し、高價なる優良品でも低價なる劣等品でも加工の費用には大差はないが、此の略、同額なる費用を要したる勞働は優良品の場合には長期間に亙つて消費されるからである。無用にして一時的なる消

費を有用にして永久的なる消費に代へることは安易への途である(5)。

(5) Say, Traité, p. 449; Cours, p. 418-9.

第三の標準は、共同的の消費たることである。世には消費の分量の大となるに從つて比較的に費用の減少を來すが如きものがある。食物の調理に於て、十人前の食事を用意するのに一人前の用意の十倍の費用を要することはない。各種團體又は工場等に於ける共同炊事の利益は茲から來る(6)。

(6) Say, Traité, p. 451.

第四は、健全なる道德の是認するが如き消費たることに在る。健全なる道德に反する消費は結局一國にとつても個人にとつても弊害となるのが常である(7)。

(7) Say, Traité, p. 451.

併しながら、セイは、以上掲げたるが如き標準に合する賢明なる消費も其の實現を妨げられる場合あることを指摘して居る。斯かる場合の一は、過度の資產不平等ある場合である。何故に然るか。セイは云ふ。不平等が甚しい場合には擬巧的欲望の滿足が益々多くなり、又迅速なる消費が益々增加し、不道德なる消費は大なる富裕と大なる貧窮との併び存する所に於て一層多く增加する。斯かる場合には、社會は高級の享樂を得る小數の人々と、之を羨望し、之を模倣せむが爲めに有らゆる手段を辭せざる多數の人々とに二分せられ、後者の階級から前者の階級へ移る爲めには有ゆる手段が善良視せられる(8)、と。賢明なる消費の妨げられる場合の第二は、國民が不節制なる政府を戴く場合である。政府は公的消費を決するの立場に在るのみならず、更に其の意見と例示とによりて多數の私的消費を導くの地位に在る。上の行ふ所は下の倣ふ所となる。政府にして奢侈と虛飾の友となれりとせば、模倣者の群も亦奢侈を行ひ虛飾を行ふに至るであらう。斯くして意思堅固なる人々をも遂に驅つて模倣者の群に投ずるに至らしめるであらう。セイは佛蘭西政府によつて懷かれた往時の戰爭熱が如何に害を與へたるかを例示して、政府の行動を愼しむ要ある所以を戒告して居る(9)。產業主義者をしての面目は此の點にも躍如たるものがあるのである。

(8) Say, Traité, p. 451-2.

(9) do., p. 452.